狂い出した歯車

バカと不幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂い出した歯車

【Ｎコード】
Ｎ１６６１Ｚ

【作者名】
バカと不幸

【あらすじ】
この街は、まるで歯車のように全てが上手く動いているだがある少年と少女の出会いにより歯車が狂い出す！！
その街に夜人目を避けた場所を好むかのように歩く少年がいたその名は志村夕貴（しむらゆうき）その少年はある少女と出会い運命が変わっていく！

１２月２３日　全ての始まり（前書き）

新規小説です。

この小説は、魔法を題材とした作品です。

嫌な場合はブラウザーバックをしてください。

１２月２３日　全ての始まり

この世界はいつも通り回っていた、それは誰も知らずに回っている。

魔法（マジック）

魔法とは、火、水、土、雷、風の五大元素に闇、光をプラスした七大元素で構築している。

聞くと、とても便利そうなものだ実際かなり便利だ。種類は多種多様あるがどれも使い方によってはかなりの力がある。例えば皆の知っている炎の球（フレイムボール）大きさは大中小と沢山あるものの魔力の精製方法はすべて同じだ。

魔法が世界的に広がったのはここ最近の事ではない、始めて世界で魔法が使われたのがメソポタミア文明世界最古の文明である。使った魔法は不明だがそれが最初だ。

例えばの話をしてみよう、君の目の前に一人の女の子が立っていた、自分自身この人に話しかけたら全てが消えてしまうなんて、考えが頭を駆け巡った。

（１２月２３日　第３魔法地区　珠洲通り《すずし》）

１２月２３日、大通りでは木にイルミネーション様の光の魔法がかかっていた。しかし夜の街並みは、場所によっては光が余り無く薄暗く奇妙な場所がある。その場所を好むかのように歩く人もいれば、

通りたくなくとも通ってしまう人もいる。前者にあたる志村夕貴(しむらゆうき)は目の前にいる少女を避けるようためにに端の歩道を歩くために少し車道側を歩き始めた。

何をエネルギーとして走ってるのか分からないけども、車輪がしっかりとある車を横に、志村は何かをかんじどっている。

（イヤな予感しかしねぇよな）

そして、志村はその女の子の横を歩いたが何も言われることなく普通に通り過ぎた。はずであった。

「ねー貴方、私の事変な目で見たでしょ？」

「いーえ見てませんよそれより、幼女(ガキ)はそろそろ帰ったほうがいいんじゃねぇか？」

「……ガキ？私が？……お前なめてるのか？」

志村の後ろから、幼女(ガキ)がコッチを指差しながらこちらに叫んでいた《ラブコール》。

「悪い、悪いそれより早く帰ったほうがいいぜ…この街は夜、治安がかなり悪いからな」

「じゃあアンタは何でこんな夜にであるいてんの？」

「俺は、高校生だからな…異能力ランク何レベだ？」

「私か？聞いて驚くな！Cランクだ！びびったか！」

周りを歩いている人は、自称Cランクのほうを向いていた。

「なるほどな……しかし帰れランクが高いからって勝てる訳でもないぞ」

「お前は私の父親か！むやみやたらに魔法使ったらビビって逃げてくだろ！」

志村はおもむろに視線を上げ…大きく溜め息をついた、言っても聞かないガキに呆れたようで、

「まぁ気をつけて帰れよ、じゃあな」

「さっさと帰れ！」

遅れたぶん時間を取り戻すため走り出そうとしたとき、後ろから悲鳴が聞こえた。振り返るとそこには、

「離せェェ！！なにしやがる！」

「こんな夜に歩いてるからだよロリ」

ガラの悪そうな二人組がガキに絡んでいた、はたから見たらロリコンが襲ってるようにも見える。

「言わんこっちゃ無い……オイお前らその辺にしておけ」

「誰だテメェ！」

「アンチャン俺達をなめるなよ俺達は二人ともDランクだぜ」

「そっちのガキCランクだぞ」

プチっと男達から音がした。その瞬間勢いよく炎の玉が飛んできた、そしてもろに喰らった志村は後ろに吹き飛んだ。

「ハァ！クソがでしゃばんじゃね！」

「誰がクソだって？」

男が声がしたほうを向くと、顔面に肉が潰れるような音をして吹っ飛んだ、それっきり起き上がってこない。

「今のは、速度を上げたかそれとも…粒子加速（バイキル）か？」

「以外だなまさかバイキルがでてくるとは……でもそんな弱い物じゃねぇ」

「俺が使ってたのは超粒子加速（バイカルア）だ」

その後、男はラリーアットをモロにくらい上に吹っ飛んだ。驚くのはこれだけではない、３０ｍの距離を１秒で縮めたのだ。

「お前は何者なんだ……」

「俺か？ハァ～分かったそんな目でみるな俺は［魔法界・Ａランク世界レベル１８位志村夕貴］この日本魔法都市では、第３位だ」

「嘘ぉ……冗談は最も上手くつくものだよ？本当だとしても何でこんな所にＡランクがいるの？」

「別にいいだろ、俺は平凡が好きなんだよ、それともＡランクは外も歩いちゃいけないのか？」

「別にそうは、いってないだろ！……あっ！お前Ａランク何でしょ、魔法の上手く使うやり方教えてよ」

「はっ？」

人知れず突然降り出した雨を浴びながら、しばし動く事ができなくなった。

「な、何言ってんのかな？アナタは」

「私を弟子にしてください！」

「断る！俺は弟子何か必要ない！」

雨が志村の身体を濡らしていく中、少女は何度も説得してくる。

「何でもするから～お願いこのとおり！」

「どのとおりだよ…ランクなんて俺は興味が無い」

「アンタが興味無くとも私はアルの！じゃあ……一週間に一回でいいから！」

「そもそも教える気が無い、ガンバ」

薄暗い通りを少し逃げるかのように進むと、街灯が立ち並ぶ大通りに出た。

「ここは見回りのパトロールがあるはずだおとなしく帰れ」

「ここまできたら、絶対、絶対教えてもらうから！」

往生際の悪いガキを放置して帰る訳にもいかず、家に連れて行くの

が嫌な志村はある案を思いつき

「本当に教わりたいなら、ついて来い」

「わ、分かった」

少し早歩きで目的地に向かった。ここからは多分5分前後で着くと予測して。

「どこに向かってるの？」

「行けば分かるよガキも知ってる場所だ」

そして目的地向かって歩き始めた。

「着いたぞ、ガキ」

「ここって…魔法警察署（マジックポリスズ）じゃんって！私は迷子じゃない！！」

「迷子だよ俺から見たらな」

志村は普通に魔法警察暑の中に入って中にいる、魔法警察官（マジックポリス）と話しをしている。

「アイツ！今に見てろ！コテンパにしてやるからな！！」

その少女は悪態を着くと走って帰っていった。その2分後志村と魔法警察官はその少女がいないことを確認すると、

「すいません、魔法警察官、多分見つかったんだと思います」

「情報ありがとう、またそういう子を見つけたらここにつれてきてくれ」

魔法警察官はポケットから銀色の棒を出した。そしてボタンを押すとブゥンという音ともにホーム画面が出てきてた。

「最新型の携帯ですか？」

「まぁね最初の方は使い方が難しかったけどもうなれたよ」

魔法警察官のおじさんは、その機械を意味もなく動かして、喋っている。

「それじゃあ僕帰りますね」

「気をつけて帰りな」

そして俺は自宅に向かって歩いて帰った。ただ女の子が尾行（スニーキング）していたのは無視をして。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1661z/

狂い出した歯車

2011年12月23日00時57分発行